

# 令和6年度広域科学教科教育学研究経費（研究概要）報告書

プロジェクト名

：人権教育の推進が多文化共生社会の実現に与える影響

研究代表者 所属大学：東京学芸大学

講座：言語文化系教育講座

代表者 氏名：李 修京

# 令和6年度広域科学教科教育学研究経費（研究概要）報告書

## 1. プロジェクト名

：人権教育の推進が多文化共生社会の実現に与える影響

## 2. プロジェクトの概要

我々が行った研究課題は「人権教育の推進が多文化共生社会の実現に与える影響はどの程度か？」である。取り組み方法（研究方法）については、多文化共生社会および人権教育の関係を整理することと、現場教育関係者及び実践家らの人権教育や多文化共生社会に向けての多角的な取り組みを確認することである。そのために、関連教育を実践する研究者や関係者、専門家らへ原稿依頼をし、記録をまとめる。また、その教育を受けた若者たちの多文化共生への意識や共生社会への認識を確認するために質問紙調査などを行う。なお、質問紙調査は、2025年6月に実施することとなった。質問紙調査の分析の技法は、質問紙調査に加えて、執筆者等へのインタビュー調査も実施する。そして、人権教育の推進が多文化共生社会の実現に与える影響の最大化を図るための条件の抽出を試み、結論をまとめ、提言を策定する。

## 3. 得られた成果の概要、今後における教育上の活用予定及び予想される効果等

我々はまず、2024年10月～2025年1月まで、人権教育や多文化共生教育を実践している様々な分野の関係者や現場教育者らにコンタクトし、現在取り組んでいる多文化共生社会に関する動きや人権教育についての事例紹介の原稿を依頼した。その結果、合計67人の国内外の専門家・研究者・現場教育に携わる関係者の聴き取り及び事例の原稿を集めることができた。医療現場の多言語による支援可能医療人を育成する医師や人権教育・多文化紹介・共生への努力や課題改善に取り組む事例など、多文化共生社会への努力と人権教育の推進の必要性が窺える、実に内容に富んだ原稿であった。我々は幾度の打ち合わせを通して国内外から集まった多くの事例原稿を編集・整理し、2025年3月31日に『多文化共生社会のために―社会的公正に向けた人権・教育の視点から』（李修京・林尚示・藤井健

志共編、権五定・鷺山恭彦監修、明石書店)というタイトルで出版している。本の目次は以下の通りである。

## 多文化共生社会のために - 株式会社 明石書店

### 【目次】

まえがき [李修京]

第1部 多文化社会へ移行する時代へのメッセージ

第1章 価値観を貫く [安斎育郎]

第2章 人権・共生・平和の実現に向けたスポーツの努力——「世界テコンドー連盟」の試み [趙正源]

第3章 友愛の地を求めて——民主主義の限界、歴史を切り開く共和主義 [鷺山恭彦]

第4章 韓国と日本、2つの祖国を生きてきた生涯 [河正雄]

第2部 多文化共生・人権・教育への多様なアプローチ

第1章 人権の歩みと共生への努力と数字にみる社会——相互努力の双方向性から共生へ [李修京]

Column 「生理」の理解と「生理貧困」の解決で共生社会へ [李修京]

第2章 多文化主義・多文化共生政策の歴史的背景と課題 [権五定]

第3章 多文化共生社会の基盤としての人権教育・啓発 [林尚示]

第4章 人権問題としての「教員の長時間労働」 [立田順一]

第5章 忘却されているもう一つの人権——労働者の海外送り出し国における問題 [カルロス、マリア・レイナルース・D]

第6章 教権と学生の人権は両立できないのか？——「学生人権条例」の廃止をめぐる論争 [金映錫]

第7章 学問の本質を教える教育論は多文化共生を促進するか [渡部竜也]

第8章 教育は私たちの何を支えるか——現代の学校の価値と可能性 [末松裕基]

Column 教育の性質と目的をどのような視野で考えていくか？ [末松裕基]

第9章 「再分配——承認ジレンマ」を超えた多文化社会の実現 [鄭虎範]

第10章 多様性の共生のために「リスペクト」の概念を探る [戸田孝子]

第11章 異なる語りをもつ他者と共に生きる市民を育てる——「真正な対話」に基づく多文化共生のための歴史教育 [金鍾成]

第12章 日本語教科書から考える多文化共生時代の言語教育——ジェンダーとセクシュアリティの視点を通して [米本和弘・石川智・森祐太]

Column 多文化社会における言語教育 [石黒みのり]

第13章 日本人学校における多文化共生に向けた教育 [見世千賀子]

Column 高等学校における英語以外の外国語という選択肢 [日下部龍太]

第14章 仮想空間と現実空間をつなぐ教育の可能性——多文化共生と社会的公正を目指して [鈴木直樹]

Column AI時代の語学教育 [木村守]

第15章 自然と人間の共生社会 [権秀賢・崔東壽]

第3部 日本の中の多文化共生と人権

第1章 「不良な子孫」を産ませない——優生思想と日本 [井竿富雄]

第2章 発達障害——「ニューロダイバーシティ」という見方へ [井竿富雄]

第3章 部落差別をなくすために——部落差別解消推進法制定を受けて [森実]

Column ハンセン病と差別 [大川正治]

第4章 在日韓国・朝鮮人のイメージ——「境界人」のこれから [林晟一]

第5章 ニューカマー1.5世の自叙伝から考える多文化共生社会の未来 [范文玲]

Column MRSDH+や In Between の尊重から始める多文化共生 [陳天璽]

第6章 日本における外国人児童生徒 [原瑞穂]

Column 多言語環境で育つ在日中国朝鮮族の子どもたち [蔡光華]

第7章 外国人医療の現場から見えてくる日本社会の課題 [沢田貴志]

第8章 人間として人間の世話をすること [色平哲郎]

第9章 映画『カムイのうた』とアイヌ文化の伝承——北海道東川町の取り組み [高石大地]

Column 若者が地方を変える「地域おこし協力隊」という選択肢 [古高桜京]

第10章 マグロの豊漁をもたらした異国の神——青森県大間の媽祖信仰 [藤井健志]

Column 海を渡ったハワイの魚名——日本と海外をつなぐ魚の名称にみる多文化と共生 [橋村修]

第11章 詩でつなぐ日韓と世界 [佐川亜紀]

第12章 「共存共生する力」を考える [梅山佐和]

第13章 環境的不公正とそのとらえ方 [永橋爲介]

Column 差別や排外的な気持ちを人が手放す瞬間 [永橋爲介]

第14章 森崎和江『からゆきさん』を読む [石井正己]

第15章 足尾銅山煙毒鉍毒事件を通じてみる人間の選択——田中正造と山田友治郎そして古河市兵衛 [濱中秀子]

Column マイノリティの社会的意味 [熊野びわ]

第16章 地球的課題に向き合うための地理教育の実践と課題 [吉田香]

## 第4部 世界の中の多文化共生と人権

### 第1章 ディズニー映画とポリティカル・コレクトネスの行方 [小澤英実]

### 第2章 女性参政権を求めて——スイス映画にみる差別との闘い [若林恵]

Column スイス映画『神の秩序』の周辺 [若林恵]

### 第3章 ヴァージニア植民地の邂逅——ポカホンタスとジョン・スミス [斎木郁乃]

### 第4章 イギリスの街にみる性の多様性——市民がつくり上げるプライド・パレードとLGBTQ+フレンドリー・スペース [影澤桃子]

### 第5章 移民と向き合うイタリア [ラタンジオ, リリアンヌ]

### 第6章 モンゴル伝統芸能の守護神——吟遊詩人のホールチが果たしてきた種々の役割 [蒙古貞夫 (モンゴルジンフー)]

### 第7章 村のよそ者と民俗儀礼 [出口雅敏]

### 第8章 中道は「真ん中の道」にあらず [鈴木隆泰]

### 第9章 音楽は国境・人種・文化・時間……を超え「人間と人間」をつなぐ [禹東熙]

### 第10章 多文化共生とスポーツ [繁田進]

Column 「外国につながる子ども」と共に成長する韓国のサッカー [李昌燁]

### 第11章 多文化社会韓国の「国民」になるという挑戦——「ナショナリティ」と「アイデンティティ」の抵抗と交錯 [車ボウン]

### 第12章 韓国における人権獲得のための闘争 [李貞姫]

### 第13章 社会科教科書における少数文化集団に関する内容の統合 [朴志玟]

### 第14章 韓国における多文化教育の実像 [許壽美]

Column AI時代における韓国の学校教育 [金秀玟]

### 第15章 韓国における外国人政策と多文化主義 [緒方義広]

### 第16章 超低出生と高齢化の進む韓国 [金泰憲]

Column 韓国の玄関口、仁川 [城渚紗]

Column 釜山地域における多文化社会への変遷 [李京珪]

### 第17章 韓国芸能の影響を受ける中国の今 [木村奈津子]

Column 中国における日本語学習者の現状 [ゴスチンゴワ]

あとがき——「グローバル社会」の共生を考える [権五定]

執筆者紹介

この本では多文化共生社会の実現のために求められる人権・教育への視点から、国内外で見られる様々な事例や課題を多角的に取り上げている。多くの実践家・教育者や専門家らにコンタクトする傍ら、最近の多文化共生と人権の動きの事例を確認することができた。また、我々が追究しようとした「人権教育の展開と多文化共生教育との相関性」について

も一定の成果を得ることもできた。この本は 2025 年 5 月現在、SNS・X などで様々な紹介がなされ、各図書館にも入れてもらうという好反応を見せている。

一方、教える側・実践する側の動きについて 67 人の事例をまとめて出版はしたものの、出版の翌週から新学期が始まり、4 月中旬からその本を使っの「人権教育」や「多文化共生」関連の授業を行っているため、受講生の多文化共生社会の実現への意識や人権教育との関連についての確認はこれからの作業になる。

なお、「人権教育」の授業では一部の執筆者の協力を得て、各自の原稿をより詳細でわかりやすく紹介する講義の機会をも設けることをしたい。そのような執筆者による講義協力と、受講生たちの毎回のリアクションペーパーの内容を踏まえつつ、李と林は来る 6 月 16 日、200 人以上の受講生が 4 月から受けてきた「人権教育」の動きと多文化共生社会への意識・関連性を知るための講義及びアンケート調査を行う予定である。今後はその分析結果と、我々が本の出版過程で行った聴き取りなどを分析し、各自が行ってきた人権教育の推進が「多文化社会」「共生社会」という側面にどのように影響し合ってきたのかを究明する。その後、それらの研究成果を我々が関わる学会や研究会、学術大会などで共同なしいし個々人で発表するつもりである。積極的な発表や研究活動を通して、人権教育の実践や研究の推進が多文化共生社会の実現に寄与するという効果が予想される。